

母親の就労が高校生の子どもへの養育行動に及ぼす影響

—母親と子どもの「好感感情」と父親との協力関係—

平田 裕美*

The Influences on Parenting Behavior of Employed Mothers of High School Students: The Positive Emotion between Mothers and Children, and the Sense of Partnership with Their Fathers

Hiromi HIRATA*

The purpose of this study was to examine differences in parenting behaviors between employed and non-employed mothers, and to investigate the factors affecting the parenting behaviors in both groups. A questionnaire survey was conducted to 1,049 high school students and their parents and a total of 268 child-mother pairs were included in the analysis. The results showed no significant difference in perceived parenting behavior between mothers of different working status. In addition, although non-employed mothers placed more weight on house-keeping matters than employed mothers ($t(195)=9.01, p<.01$), no significant differences were observed in children's evaluation toward mother's parenting behaviors, their positive emotion toward their mother, and the partnership between parents. These results indicated no evidence to support the mother's working status to influence their parenting behaviors. Multiple regression analyses were conducted to determine influencing factors for parenting. From the analyses, positive emotion toward their children, child-perceived mother's communication behavior, good partnership and cooperation with husband are found to be influence working mother's communication behaviors ($p<.01$). In comparison, communication behavior of non-working mothers was associated with positive emotion toward children, child-perceived mother's disciplinary behavior and mother's cooperation with husband ($p<.01 \sim p<.05$). For discipline behaviors, positive emotion toward children, child-perceived mother's disciplinary behavior and mother's cooperation with husband were associated for employed mothers whereas only the latter two variables influenced disciplinary behavior of non-employed mothers ($p<.01, p<.05$). These results indicated that, regardless of their working status, cooperation with husband is particularly essential for a better parenting by mothers. On the other hand, non-employed mothers with a lack of affection toward their children had a lack of disciplinary behavior in teaching their children about morals and social rules.

key words: employed mother, adolescence, parenting, father

目 的

出産、育児にかかわらず、就労を継続する「働く母親」というライフスタイルを選択する女性についての見解が散見される（例えば Bianchi & Milkie, 2010）。付随して、母親の家事に費やす時間は減少し、家事にかかわる父親は緩やかではあるが増加し

たとの報告も見受けられる（Coltrane, 1996; 厚生労働省, 2005）。しかし、就労と家庭における役割遂行をバランスの観点から見ると、子どもをもつ共働き夫婦を対象とした調査では、仕事が重要な局面にある場合、父親が家庭に割く時間を減らすことに対し、母親は直面している以外の仕事量を減らし、他者のサポートにより家庭に時間を費やす工夫をして

* 女子栄養大学

いる（小堀，2010），父親の長時間勤務や残業が多い状況と母親の仕事と家庭との両立には関連がない（Dilworth, 2004; Fagan & Press, 2008）など，母親の家庭における役割遂行には，さして大きな変化が起きたとは安易に考えられない。母親が就労をもつ背景には，家事，子どもの養育に加え，家計を維持するための稼ぎ手としての役割を担おう，担わなければならないなどの考えもあるだろうが，多重役割の観点では，就労と家庭において，どちらを優先させるかについての葛藤，双方を担うことによる現実的な負担が就労をもつ母親には確認されている（平田，2003; 加藤・金井，2006）。この視点を読み解いていくと，家庭における母親の役割を強調するあまり，子どもの問題行動，不適応，精神疾患と関連して，母親を責める「mother-blaming」，さらに他者からの非難だけではなく，母親自身が自らを責める「self-blaming」傾向が指摘されている（Jackson & Mannix, 2004）。母親として，職業人として，完璧に役割をこなそうとする志向が強いほど，手を抜けない母親に関する理解（長谷川，2010）からも，自らが働くことにより，子どもや配偶者である父親に不憫な思いをさせたくないなど，母親は自責の念に陥りやすいことが察せられ，結果として，働くことにより，自らの家事，養育に否定的イメージをもちやすいことが考えられる。しかしながら，母親が考える働くことによる否定的イメージと，養育への子どもの認識とを関連させて述べられた見解は少ない。母親の就労率は上昇し続けている現状から，母親の就労の有無と子どもの母親への評価や関係性において，実際に関連があるのかどうかを，まず検証する必要があると思われる。

ここで，親の養育と子どもとの関係性についてだが，Hinde (1979) は，個人の関係性とは，親しい相互行為が蓄積されることにより，互いにかかわる文脈が形成されると説明し，親と子どもの関係性に言及している。Weingarten (1991) も親と子どもの新密性に着目し，互いにかかわる内容そのものではなく，実際に親と子どもがかかわる，その意味を共有するプロセスに参加する意識により親密性をもたれていくと示している。親が子どもに親しみをもつ経験についての調査（Oliphant & Kuczynski, 2011），子どもと共通の趣味や一緒に過ごす時間をもつなどの親の親和行動と子どもへの親しみや関係性に注目し

た調査（Harach & Kuczynski, 2005）では，親は子どもとかわることにより，親としての責任を担う行動を示す，親として子どもをもつことの意味を知ることが明らかにされている。さらに，子どもとの積極的な相互のやり取りから，親は情動の重要性を体験するなどの報告（Marshall & Lambert, 2006）からも，父親，母親は子どもに実際にかかわることにより，子どもへの愛情をもち，養育の役割遂行に取り組もうとするのではないかと考えられる。一方，子ども側の視点に立つと，親の養育における暖かさや積極的にかかわる姿勢と子どもの良好な行動や情動の表出との関連（例えば，Laible & Thompson, 2007）より，親と子どもの相互の関係性を構築・維持するには，まず，親も子どもも互いにかかわることが重要である。しかしながら，近年，子どもの意向に沿うような形でのみかわる，社会のルールなど家庭でのしつけをする親としてではなく，友達のような関係で子どもに接しようとする青年期の子どもの親の姿勢に警鐘が鳴らされている。このような親の養育行動に見られる共通点は，子どもに嫌われてまでも，社会のルールを教える必要があるのか，あるいは，嫌われているようなので注意できないなど，いずれも子どもに社会のルールを教えることを避けようとする親の姿である（平田，2005）。親としての姿勢は，アイデンティティ確立の過渡にある青年期の子どもの精神的健康に影響する（Seibel & Johnson, 2001）などの説明からも，本稿においても，心理的離乳を課題とし反省的思考とともに，親への評価も厳しくなる青年期の子どもへの養育行動とその親との関係性に注目する必要があるだろう。

そこで，就労をもつ母親の増加が報告される現状において，母親が就労をもつことにより，子どもは母親の養育について，これまでの先行研究において予測されているほど，否定的，消極的な受けとめをしているのかどうかを，前述の親と子どもの関係性や親密性に関する見解より，親と子どもの双方の好感感情に着目し，親との関係を調整する過渡にある青年期中期の高校生とその母親を対象に，母親の就労の有無と高校生の子どもの養育行動，関係性との関連について検討する。また，母親の養育行動に影響する要因としては，これまでの就労と家庭とのバランスの観点から，配偶者である父親との協力，母親の就労時間，家庭への心理的配分として，家庭

への比重に着目し、母親の養育行動をより促進させる環境整備の立場からの分析を進める。

仮説1: 母親の就労の有無が、子どもの母親への好感感情や養育行動に影響する。

仮説2: 母親の養育行動には、母親自身の子どもへの好感感情、子どもの母親への好感感情や養育行動についての認識、配偶者である父親との協力関係が影響する。

方 法

調査協力者

東京都内の私立高校に通う生徒 1,049 名とその保護者 (2003 年 7 月)。

手続き

配布・回収は、協力を依頼した高校の担任が HR で父親・母親・子ども用質問紙を 1 セットにしたものと 3 枚一組の番号の印字された封筒を生徒に配布し、父親用、母親用は生徒が自宅に持ち帰り一週間後に回収した。子ども用質問紙は、HR 時に教室で実施する場合とそのまま自宅に持ち帰り、父親用、母親用質問紙と同じように回収を行う場合の二通りに分け、どちらを選択するのかについては担任教師の意向に従った。また、親に関する質問の仕方

は学校側と話し合い¹⁾、一人親家庭の場合は、生徒の意思を第一に、提出についても担任教師の配慮に一任した。HR 時に教室で行う場合は、回答後、生徒自身が自分で封をし、その場で回収する方法をとってもらった。保護者には、質問紙とは別に調査の依頼文をつけ、回答後はなるべく自身で封をし、子どもを通して学校に提出してもらえるようお願いをした²⁾。担任教師には、事前に番号で父親、母親、子どもセットでの収集に関する説明と、子ども同士で封筒を取り替えたりしないように、また、封筒をなくした場合は、余分の封筒を渡すことで補う指示をもらった。父親・母親・子どもの回収数は、保護者 596 名 (28.4%)、子どもは 332 名 (31.6%) であった。この時点で、本稿では、母親の就労の有無に注目した母親の養育行動に焦点を当てるため、父親の回答、一人親家庭の回答の解析は別の機会に譲ることとした³⁾。さらに、各尺度項目に、一つでも欠損値があるものは除外した⁴⁾。結果、母親 268 名が分析対象とされた (年齢 $M=47.8$, $SD=10.03$)。うち、仕事をもつ母親⁵⁾は 160 名 (男子: 57 名, 女子 103 名)、専業主婦の母親⁶⁾は 108 名であった (男子: 40 名, 女子: 68 名)。

¹⁾ 父親、母親については、さまざまな家庭状況から、現在、父親がいない場合、その代わりを担ってくれている養育者を対象として答えるという意味で、父親には「父親に準じる人」、母親には「母親に準じる人」という文章を付け加えることが調査協力校より提案され、筆者は、これを理解し、この点に関する生徒からの質問には、担任教員に一任することを承諾した。

²⁾ 倫理的配慮について、この調査における協力者には、保護者への依頼文に本研究を行う目的を明記し、いずれの質問用紙の表紙にも、その意思に基づいて参加の中断、あるいは拒否ができること、それにより調査協力者の不利益にならないことについての説明を記載した。さらに回答されたデータ情報の秘密保持の厳守を記載し、質問用紙の表紙にデータ結果の公開に同意の意思がない場合は×、ある場合は○の記載をする欄を設け、同意に関する意思の表示の記載のお願いをした。調査実施後に、調査協力校にて、日程を取り決め、本調査に関する質問を受け付けることを担任教員に板書してもらった。調査終了後、学校側より、保護者からの質問の申し出はなかったことが報告された。

³⁾ 保護者用質問紙では、職種、通勤時間を含めた就労時間、家庭への比重 (「ここ半年間、家庭と仕事をたして 100% とすると、家庭に対しては何%の力をそいでいらっしゃいますか。例えば、家庭に対して「35%」のようにお答えください。家庭に対して、%」)、父親、母親共通の項目として、養育行動、子どもへの好感感情、配偶者である父親/母親との子育てにおける協力についての考え、フェイスシート (住居形態、対象となる子どもの性別、学年、家族構成、年齢) を尋ねた。子ども用質問紙は、父親 (父親に準じる人)、母親 (母親に準じる人) の養育行動、父親 (父親に準じる人)、母親 (母親に準じる人) への好感感情、フェイスシート (学年、性別) から構成された。子どもとの関係については、父親、母親であるかどうかの確認のために尋ねたが、配布された子どもと親との血縁関係は尋ねていない。

⁴⁾ フェイスシートにおける通勤時間を含めた就労時間、職種、家庭への比重については、該当の項目のみ除外した。職業、通勤時間を含めた就労時間の記入はあるが、家族への関与の記入がないもの、専業主婦と回答しているが、家庭への比重の記入がないものは除外した。

⁵⁾ 母親の就労状況は、事務系 35、技術系 11、サービス系 39、自営業 (個人) 29、専門職 (教職・医療関係) 13、管理職 (企業) 2、その他 31 であった。通勤時間を含む就労時間は、家庭から離れる時間を問題としているため、パート、正社員などの雇用形態は尋ねていない。

Table 1 Demographic Characteristics of the Study Sample ($N=268$)

Variable	Mothers	
	n	
● Race		
Japanese	268	
● Employed	160	
Occupation category		
Official	35	} 85
Technical	11	
Sales	39	
Self-supporting (independent)	29	
Professional (teaching, Medical)	13	
Managerial	2	
Others	31	
● Non-Employed	108	

Note: living with partner, $n=236$, age: $M=47.8$, $SD=10.03$

調査内容

母親が申告する養育行動、子どもからとらえた母親の養育行動については、平田(2005)による、親と子どものコミュニケーションを担う行動を意味する会話／表現行動と、社会のルールを教える行動を意味する管理／成熟への要求行動から成立する「親の養育行動尺度」を、母親の養育行動に影響する要因については、「家族の中の問題（子どもの教育やしつけを含めて）については夫婦で考える」などの項目からなる「配偶者との養育協力尺度」を用いた。母親の子どもへの好感感情、子どもの母親への好感感情は、予備調査として、パーソナリティ認知に用いられやすい特性形容詞（井上・小林, 1985）の例を参考に挙げ、「あなたのお父さま／お母さま／お子さまは、あなたにとって、_____な存在である」という、下線部に当てはまる形容詞の記入を求めた。結果、「好きな」「頼もしい」「信頼できる」「頑張っている」「協力的な」「気難しい」が採用された。これらの形容詞6項目に、母親には「わたしにとって、子どもは_____な存在である」と、子どもには「わたしにとって、お父さんは／お母さんは_____な存在である」というように、他尺度と

同様に「かなりそう思う／した」から「全くそう思わない／していない」の6件法で尋ねた。

結果

母親が申告する養育行動、子どもからとらえた母親の養育行動について、因子分析（主因子法, *promax* 回転）を施した結果、原著と同様に「会話／表現行動」と「管理／成熟への要求行動」の2因子が抽出された。信頼性係数 Chronbach の α 係数を算出したところ、母親は $\alpha=.84$, $\alpha=.80$, 子どもから見た母親は $\alpha=.94$, $\alpha=.83$ であった。養育における配偶者との協力（「配偶者である父親との協力」と示す）についても、同じように因子分析（主因子法）を施したところ、1因子性が確認された（ $\alpha=.91$ ）。さらに、母親の子どもへの好感感情、子どもの母親への好感感情に関する因子分析（主因子法）の結果、「気難しい」という項目のみ負荷量が低いため除外した。再度因子分析を行うと、それぞれに固有値が急激に下がる状況が見られ（母親：第1: 2.76, 第2: 0.78, 第3: 0.55, 子ども：第1: 3.70, 第2: 0.48, 第3: 0.33）、項目負荷量より、1因子性が高いと判断した（母親 $\alpha=.80$, 子ども $\alpha=.91$ ）。親と子どもの双方への好感感情を示している内容を鑑み、親と子どもの好感感情尺度と命名した（Table 2）。各尺度の信頼性係数は、Chronbach の α 係数で、.80～.94と満足のいく値が示された。

1. 母親の就労の有無による影響

母親の申告する会話／表現行動（「母会話行動」と示す）、母親の申告する管理／成熟への要求行動

Table 2 Principal Component Analysis (Positive Emotion)

	Mother	Communality	Child	Communality
Reliable	.73	.53	.86	.73
Trusting	.69	.48	.85	.72
Cooperative	.67	.45	.79	.65
Persevering	.63	.39	.72	.53
Likable	.59	.35	.86	.76
Contribution (%)		59.84		74.43
$\alpha=$		.80		.91

Note: My mother/My children means _____ for me.

⁶⁾ 就労は「無」、通勤時間を含めた就労時間も「無」と回答している母親は、専業主婦と判断したが、専業主婦と回答しながら、通勤時間を含めた就労時間を尋ねる項目に時間を記入しているものが見られた（ $M=0.13$, $SD=0.46$, $R=0-2$ ）、内職等を指しているのか、家事労働を指しているのか判別はつかない。だが、専業主婦と答えているため、今回は専業主婦として分析に加えた。

Table 3 Means, Standard Deviations and Statistical Analysis

Variable	Employed mothers			Non-employed mother			<i>t</i>
	<i>M</i>	<i>S.D</i>	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>S.D</i>	<i>N</i>	
1. Mother: positive emotion	4.83	0.71	160	4.90	0.61	108	n.s.
2. Mother: communication	4.56	0.58	160	4.60	0.56	108	n.s.
3. Mother: control	4.72	0.58	160	4.74	0.62	108	n.s.
4. Child: positive emotion	4.79	1.02	160	4.81	1.01	108	n.s.
5. Child: communication	4.23	1.19	160	4.21	1.16	108	n.s.
6. Child: control	4.28	0.96	160	4.47	0.99	108	n.s.
7. Mother: cooperative parenting with husband	4.42	0.86	160	4.57	0.00	108	n.s.
8. Working time	6.51	2.45	160	0.15	0.85	15	n.s.
9. Weight to family (%)	62.41	16.78	159	88.07	15.67	41	**

** $p < .01$

Note: Significant differences between employed mothers and non employed mothers.

1. Mother: positive emotion : Mothers report on positive relationship toward her child.
2. Mother: communication: Mothers report on her nurturance and communication behavior toward her child.
3. Mother: control: Mothers report on her control and maturity demanding behavior toward her child.
4. Child: positive emotion: Children report on positive image toward thier mothers.
5. Child: communication: Children report on mothers nurturance and communication behavior.
6. Child: control: Children report on mothers control and maturity demanding behavior.
7. Mother: cooperative parenting with husband: Mothers report on sense of cooperative parenting with her husband.
8. Working time: Mothers report on her working and commuting time.
9. Weight to family (%): Mothers report on her given more weight on household.

(「母管理／成熟行動」と示す), 子どもからとらえた母親の会話／表現行動(「子→母会話行動」と示す), 子どもからとらえた母親の管理／成熟への要求行動(「子→母管理／成熟行動」と示す), 母親の子どもへの好感感情, 子どもの母親への好感感情, 母親が申告する配偶者である父親との協力, 家庭への比重に, 子どもの性別における差異, そして, 母親の就労の有無を考慮した t 検定を実施した。子どもの性別による有意な差はどの変数にも見いだされなかった(n.s.)。そこで, 母親の就労の有無については, 男女込みの子どもデータを用いて検討した。Table 3 に示されたように, 家庭への比重のみ有意であった($t(195)=9.01, p<.01$)。

2. 母親の養育行動への影響

働く母親と専業主婦である母親の養育行動への影響を検討するため, 働く母親と専業主婦の母親の各変数間の相関を示す(Table 4, Table 5)。働く母親については, 就労時間とそれぞれの養育行動との関連を除いて, 中程度から, やや強い正の相関が見いだされた。専業主婦の母親では, それぞれの養育行動と子どもからとらえた母親のそれぞれの養育行動において, 中程度の正の相関が見られた。だが, 働く母親ほどの有意な値は見いだされなかった。これら

の相関を参照に, 働く母会話行動, 働く母管理／成熟行動, 専業主婦会話行動, 専業主婦管理／成熟行動を従属変数とし, 最初に感情の要因として, 母親の子どもへの好感感情, 子どもの母親への好感感情, 次に, 子どもからとらえた養育行動の要因として, 子→母会話行動, 子→母管理／成熟行動, 最後に配偶者である父親との協力, 母親の時間配分としての就労時間, 家庭への比重を投入する階層的重回帰分析を施した。Cohen & Cohen (1983) による原因と思われる変数を先に投入する指摘に従い, 感情の要因と従属変数との関係を確認した後, この要因の影響を統制したうえで, それぞれの変数を順次投入することにより, どの程度の有意な関係なのかを確認した。ただし, 有意な説明力が見られなかった場合は, 各ステップの段階にて除外した(Table 6)。結果, 働く母会話行動には, 母親の子どもを頼もしい存在と思う好感感情, 子どもからとらえた母親の会話行動, 配偶者である父親との協力が, 働く母親の子どもの相談にのるなどのコミュニケーションをとる行動に影響していた(いずれも $p<.01$)。しかし, 子どもからとらえた母管理／成熟行動の影響は見られなかった。働く母管理／成熟行動には, 母親の子どもへの好感感情, 子どもからとらえた母親の

Table 4 Correlations Matrix: Employed Mothers

Variable	1	2	3	4	5	6	7	8
1. Mother: positive emotion	—							
2. Mother: communication	.45**	—						
3. Mother: control	.36**	.56**	—					
4. Child: positive emotion	.32**	.34**	.34**	—				
5. Child: communication	.31**	.39**	.41**	.82**	—			
6. Child: control	.25**	.30**	.53**	.67**	.68**	—		
7. Mother: cooperative parenting with husband	.22**	.30**	.38**	.21**	.21**	.23**	—	
8. Working time	-.05	-.09	-.10	-.06	-.13*	-.13*	-.09	—
9. Weight to family (%)	.13	.28**	.24**	.17*	.27**	.21**	.23**	-.46**

** $p < .01$, * $p < .05$

Table 5 Correlations Matrix: Non-Employed Mothers

Variable	1	2	3	4	5	6	7	8
1. Mother: positive emotion	—							
2. Mother: communication	.55**	—						
3. Mother: control	.22	.32**	—					
4. Child: positive emotion	.26	.30**	.04	—				
5. Child: communication	.19	.28**	.05	.82**	—			
6. Child: control	.13	.27**	.29**	.56**	.47**	—		
7. Mother: cooperative parenting with husband	.41**	.41**	.20**	.08	.07	.11	—	
8. Working time	.00	.01	.12	.01	.07	.03	-.04	—
9. Weight to family (%)	.28	.11	-.06	.04	.10	-.07	.14	-.39**

** $p < .01$, * $p < .05$

管理／成熟行動、配偶者である父親との協力が母親の子どもに社会のルールを教えるなどの行動に影響していた（いずれも $p < .01$ ）。だが、子どもからとらえた母会話行動の影響は見られなかった。次に、専業主婦会話行動には、母親の子どもへの好感感情、子どもからとらえた母親の管理／成熟行動、配偶者である父親との協力が専業主婦の母親の子どもの相談にのるなどのコミュニケーションをとる行動に影響していた（ $p < .01$, $p < .05$, $p < .05$ ）。しかし、子どもからとらえた母会話行動の影響は見られなかった。専業主婦管理／成熟行動には、子どもからとらえた母管理／成熟行動、配偶者である父親との協力が影響していた（いずれも $p < .05$ ）。だが、母親の子どもへの好感感情、子どもからとらえた母親の会話行動による影響は見られなかった。また、働く母親、専業主婦の母親の双方の養育行動において、子どもからとらえた母親への好感感情、母親の就労時間、家庭への比重による有意な説明力は認められなかった。

考 察

本研究では、母親と高校生の子どもを対象に、まず、母親の就労の有無により養育行動や子どもの認識に影響があるのかどうかを確認し、そのうえで、母親の養育行動への影響として予測される変数を順次投入することにより、その影響の最終ステップにおける貢献度を検討した。

1. 母親の就労の有無による影響

母親の就労の有無による影響では、働く母親よりも専業主婦の母親のほうが家庭に比重を置いていたが、それ以外の変数に有意な差は認められなかった。仮説1「母親の就労の有無が、子どもの母親への好感感情や養育行動に影響する」は棄却された。仕事をもつことにより、家庭に比重をかけられないと母親が考えていても、先行研究で指摘されていた、「子どもに不憫な思いをさせているのではないか」という母親による「自らの養育への否定的イメージ」を実証する結果は、本稿では見いだされなかった。働いているという理由があろうとも、子ど

Table 6 Multiple Regression Analysis: Employed Mothers and Non-Employed Mothers

Variable	Employed mother		Non-Employed mother	
	Communication	Control	Communication	Control
Mother: positive emotion	.39**	.27**	.42**	.13
Child: communication	.22**	.28	.15	.05
Child: control	.19	.42**	.19*	.23*
Mother: cooperative parenting with husband	.18**	.21**	.21*	.20*
R^2 (adjusted)	.35 (.33)	.42 (.41)	.35 (.34)	.10 (.09)
F	26.61**	36.29**	19.41**	6.09**

* $p < .05$, ** $p < .01$

もへの養育に「手を抜かない」「手を抜けられない」母親の考えが示されたとも思われる。だが、配偶者である父親との協力にも有意な差が見られなかったことから、働く母親の家庭における養育には、就労をもつ、もたないは関係なく、むしろ、家庭における役割を予測以上に遂行しようとする母親の姿があると言えるだろう。

2. 母親の養育行動への影響

私の子どもは「頼もしい」「信頼できる」という子どもへの好感感情、母親は（私と）コミュニケーションをとってくれているという子どもからとらえた母親の会話行動、配偶者である父親との協力が、働く母親の子どもとコミュニケーションをとる行動に影響していた。また「私が悪いことをしたとき、注意し、厳しく叱る」という社会のルールを教えてくれている母親であるという子どもの認識、母親の子どもへの好感感情、配偶者である父親との協力は、働く母親の子どもをしつける行動に大きく影響していた。子どもを頼もしいと思う好感感情、母親の養育行動についての子どもの認識が、働く母親の子どもとコミュニケーションをとる、子どもをしつける行動に反映され、子どもへのかかわりを促進する要因の一機能していることが明らかにされた。子どもに嫌われたくないため注意しないという親の姿に警鐘が鳴らされている状況に、子どもをしつける原動力をもつ、責任をもつ、という意味合いから、この結果は注目する価値がある。一方、専業主婦の母親では、母親の子どもへの好感感情、配偶者である父親との協力、母親は社会のルールを教えているという子どもの認識が、専業主婦の母親の子どもとコミュニケーションをとる養育行動に影響していたが、専業主婦の母親の子どもをしつける行動

には、母親の子どもへの好感感情の影響は見られず、子どもからとらえたしつける行動と、配偶者である父親との協力が影響していた。結果より、専業主婦の母親が子どもに、頼もしい、信頼できるなどの好感感情を上手くもてない場合は、子どもをしつける行動を起こしにくいということが理解された。さらに、母親はコミュニケーションをとっていると考えていても、子どもは社会のルールを教えるなどのしつける行動と受け止めていることから、専業主婦の母親と子どもの距離（感覚）の取り方、双方の受けとめ方の難しさがうかがえた。働く母親よりも専業主婦の母親のほうが、在宅時間が長い、家庭外における交友可能な対人関係の幅がかぎられていることより、専業主婦の母親については、「風通しの良い家庭環境」の視点からの見直しが必要であろう。親を一人の人間として、冷静に見つめだす青年期特有の発達段階を考えると、親と子どもの精神的、物理的な距離（感覚）、親の交友範囲を考慮した解析が待たれる。そして、子どもの母親への好感感情、母親の就労時間、母親の家庭への比重は予測に反して関連なく、働く母親、専業主婦の母親、両者の養育行動には、共通して「家族の中の問題（子どもの教育やしつけを含めて）」については夫婦で考える」など、すなわち配偶者である父親と二人三脚で子どもを育てているという考えが母親の養育行動の重要な促進要因として機能していることが認められた。他方、子どもの母親への好感感情による影響が見られなかったことについては、先行研究の知見とは異なる結果ではあるが、子どもが自分をどのように受け止めようとも、子どもを育てる母親の考えには変化がないことが示されたと思われる。母親の就労時間の長短、家庭への心理的な配分にも関連が

なかったことから、家庭本来の養育機能を健全なものにするには配偶者である父親との協力関係が、何よりも必要不可欠であることが本稿でも確認されたと言えよう。よって、仮説2「母親の養育行動には、母親自身の子どもへの好感感情、子どもの母親への好感感情や養育行動についての認識、配偶者である父親との協力関係が影響する」は、母親自身の子どもへの好感感情、子どもの母親への養育行動の認識、配偶者である父親との協力関係は影響していたが、子どもの母親への好感感情による影響などは認められなかったため、一部採択とされた。

働く母親の考える、養育における否定的イメージを実証する子どもの認識は認められなかったが、本稿より、働く母親の状況には、母親が自ら課している養育の役割など、いくつかの課題が提議された。

今後は、親としての役割、交友範囲に配慮した対人関係を含めた個人差、子どもの発達段階に合わせた親との距離（感覚）を指標に、よりミクロな視点からの検証を進めていきたい。

引用文献

- Bianchi, S. M. & Milkie, M. A. 2010 Work and Family Research in the First Decade of the 21st Century. *Journal of Marriage and Family*, 72, 705-725.
- Bojczyk, K. E., Lehan, T. J., McWey, L. M., Melson, G. F., & Kaufman, D. R. 2011 Mothers' and their adult daughters' perceptions of their relationship. *Journal of Family Issues*, 32(4), 452-481.
- Cohen, J. & Cohen, P. 1983 *Applied multiple regression/correlation analysis for the behavioral sciences*. 2nd ed. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Coltrane, S. 1996 *Family man: Fatherhood, housework, and gender equity*. Oxford: Oxford University Press.
- Dilworth, J. E. L. 2004 Predictors of negative spillover from family to work. *Journal of Family Issues*, 25, 241-261.
- Fagan, J., & Press, J. 2008 Father influences on employed mothers' work—Family balance. *Journal of Family Issues*, 29(9), 1136-1160.
- Harach, L. D. & Kuczynski, L. J. 2005 Construction and maintenance of parent-child relationships: Bidirectional contributions from the perspective of parents. *Infant and Child Development*, 14, 327-343.
- 長谷川有香 2010 働く母親への移行期における時間配分の調整過程と日々の感情経験の変化 心理学研究, 81(2), 123-131.
- Hinde, R. A. 1979 *Towards understanding relationships*. London: Academic Press.
- 平田裕美 2003 日本の父親の家庭役割と就労との関連：役割分業観の影響力 お茶の水女子大学人間文化論叢, 7, 235-245.
- 平田裕美 2005 父親の養育行動と高校生の子どもの精神的健康：母親の養育行動との直接比較 お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム 平成 15 年度公募研究成果論文集, 2, 71-81.
- 井上正明・小林利宣 1985 日本における SD 法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観 教育心理学研究, 33, 253-260.
- Jackson, D. & Mannix, J. 2004 Giving voice to the burden of blame: A feminist study of mothers' experiences of mother blaming. *International Journal of Nursing Practice*, 10, 150-158.
- 加藤容子・金井篤子 2006 共働き家庭における仕事家庭両立葛藤への対処行動の効果 心理学研究, 76(6), 511-518.
- 小堀彩子 2010 子どもをもつ共働き夫婦におけるワーク・ファミリー・コンフリクト調整過程 心理学研究, 81(3), 193-200.
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局 2005 働く女性の実情.
- Laible, D. & Thompson, R. A. 2007 Early socialization: Theory and research. In Grusec, J. E., & Hastings, P. D. (Eds.) *Handbook of socialization: A relationship perspective*, 181-207. New York: Guilford Press.
- Marshall, S. K. & Lambert, J. D. 2006 Parental mattering: A qualitative inquiry into the tendency to evaluate the self as significant to one's children. *Journal of Family Issues*, 27, 1561-1582.
- 松浦素子 2006 成人女性のライフスタイルと精神的健康との関連：役割達成感とパーソナリティの観点から 心理学研究, 77(1), 48-55.
- Olipant, A. E. & Kuczynski, L. 2011 Mothers' and fathers' perceptions of mutuality in middle childhood: The domain of intimacy. *Journal of Family Issues*, 32(8), 1104-1124.
- 太田さつき 2006 多重な役割従事と心理的 well-being との結びつき：役割間の関係性を含めた検討 心理学研究, 76(6), 503-510.
- Seibel, F. L. & Johnson, B. W. 2001 Parental control, trait anxiety, and satisfaction with life in college students. *Psychological Reports*, 88, 473-482.
- Weingarten, K. 1991 The discourses of intimacy: Adding a social constructionist and feminist view. *Family Process*, 30, 285-305.

(受稿：2010.4.13; 受理：2012.8.2)